

対照的である。

表4. オニバス発生箇所の表層地質分類

地質時代	表層地質分類		東畿	中畿	西畿	合計
沖積世	g	礫がち堆積物			1	1
	s	砂がち堆積物	1			1
	m	泥がち堆積物	1		3	4
	gsm	礫・砂・泥堆積物	1	8		9
洪積世	t <sub>2</sub>	(低位堆積物) 粘土・砂礫	2	1	18	21
	t <sub>1</sub>	(高位堆積物) 礫・砂・粘土	2			2
合	計		7	9	22	38

### 考察

以上香川県におけるオニバスについて、分布を主体に見てきたが、何故に西讃地区において分布の集中傾向が見られるのか今のところは不明である。あるいは、分布しているため池のほとんどが、洪積世の低位推積層に造られたものである事と、何らかの関係があるのかもしれない。

本県のため池数は、県の台帳に登録されているものだけでも一万六千余りと全国3位の数を誇るが、これらのため池が現在の様な形に整備されたのは、江戸時代初期頃からと言われており、地史的観点からはかなり新しいものと言える。一方、オニバスは遺存的な植物であると言われ(大滝, 1982; 角野, 1983) ているが、香川県における分布のほとんどが人工のため池である。しかも、全ての生育地が、第四紀洪積世以降と言う若い地層に造られたため池である。したがって、そこに分布するオニバスの分布史については、地史的観点からすれば、より新しいものと考えられることができる。

また、オニバスの分布拡大の機構については、水生植物であるので当然の事ながら、水系による分散が考えられる。しかしながら、本県の場合、この点について多少の検討を行なってみたが、必ずしも明らかにする事は出来なかった。むしろ、直接的に水系による関連を考えられる事例は少なかった。

オニバスが何により分布を拡大してゆくのかは、今後の大きな研究課題であるが、本県における分布を論ずるに当っては、ため池と人間との係りの中でオニバスがどのような位置づけにあったのか、文化史的な側面からの研究も今後必要である。

### 参考文献

- 祝原 道衛. 1982. オニバス. 筑豊博物 27:21-25, 筑豊博物研究会.  
大滝 末男. 1982. オニバス. アニマ 115(9): 54-60.  
———・石戸 忠. 1980. 日本水生植物図鑑. 北隆館.  
角野 康郎. 1983. オニバスの自然誌. Nature Study. 29(6):63-66.

### ○沈水水草の気中生育化

8月の第7回全国集会で、臨時に表題のような話を紹介させていただきました。

兵庫教育大学の山田卓三研究室のしごと。高田憲明氏が展示物件を持参され、若干の説明をされました。

オオカナダモやフサモ類を、フラスコ内寒天培地で器官培養した。再生植物体は、培地上や気中へ生長していった。葉には気孔といってもよい構造が生じた。

私は、これは大変画期的なことからであると思います。これからの進展に期待しています: 1. 完全沈水の水草(イバラモ、スプタなどなど)で実験してもらいたい。2. 培養器のフラスコやコルベンは、かなり湿度が高いはず。野外と同じ湿度にしても、うまくゆくのか。3. 気孔

様の構造の精査。4. ガス代謝の様子。(原田市太郎)

○南光重毅『水辺に咲く植物』(誠文堂新光社、1984年12月; 32頁、2,000円)

植物の具体的な生活を美しい写真で紹介した“身近な植物の一生”シリーズの一冊。この本では、ヒシ、ミツガシワ、ネジレモ、サンショウモ、タヌキモの5種について、発芽、生長、開花、受粉、結実、越冬など、それぞれの種がもつユニークな生活がとらえられている。つい見過してしまいがちな特徴がうまく撮影されており、著者の努力の跡がうかがえる。このシリーズの本は「サンケイ児童出版文化賞」を受賞したもので子供向きの本ということだが、扱われている内容はレベルが高い。大人も興味をもって目を通すことができる。(角野康郎)